

2021 年に向けて

社会福祉法人 明澈会
理事長 上蘭 昭二郎

正しい生活ではなく、心地良い生活を、そして子どもの情報をどこからでも受けとめられる専門職に。

2007 年に南さつま市にて生活を開始する目的は、施設の小規模化・自立支援・地域子育て支援の三つでした。その延長線上に、2015 年よりさらなる小規模化と地域子育て支としての桜寮（里親支援・児童家庭支援センター設置準備・子育て支援）の建設を行いました。2007 年の自立支援－自立支援棟の設置は、自立以前の愛着関係の不成立状況にある子どもにとっては、無理があったため 2015 年の施設の完全なホームとして見直しをしてきました。

2014 年度に建物の物理的条件は、ほぼできあがりしました。2015 年度は、子ども達の生活と職員の労働条件と南さつま子どもの家がこの 42 年間培ってきた生活の質について見直しをし 今一度生活のあり方と一人一人が生活を仕事にするためにどのようにしたら良いかを考えていく年とし、見直しを計ってきました。

女性が主人公となる運営を更に目指します。

子どもが、各ホームの中で心地良く生活できるかが、この施設の大事な使命だと考えています。管理的にならずに、生活を大事にするために何が出来るかを、引き続き実践していきたいと思っています。ある子どもとの関わりの中で、「ただいまといえる場所ができました」との一言が、正しい生活よりも心地よい生活をとの意味を理解しました。この一言を引き出したホームの関わりを大事にしたいと思います。そのためには、職員一人一人が、この施設で何をしたいのか声をだし、声をだしたことが評価されるようにしたいと考えます。

ルールーは、社会的常識という曖昧模糊とした判断基準で考えた方がよいと思います。そのために施設長の子どもへの育ちへの思いを提案し、検討して具体化できるようにして行こうと考えます。

子どもとの関わり：男性職員と女子児童との関わり方 女子職員と男子児童の関わり方の確認

女子児童と男性職員話す場合は、極力居室は避ける。その逆も同様です。話す場合は公的な場所とし誰が誰と話をしているのか、他の職員に伝える。できるだけ、複数の職員で対応する。

職員間の名前の呼び方（呼び捨てにしない・身体的な特徴に触れない）

職員間の呼び捨ては、行わない。体や年齢などについて（職務上必要な場合は別として）誰に話すときでもふれない。揶揄もしてはいけない。

1. 体制の考え方は、全職員で情報を共有しつつ自分の担当のことにのみとらわれずに施設総体で子どもとその家族に関わりをもてないか考えたものです。私たちの家族へのアプローチと養育の力を今年もつけて行く努力をしましょう。

又、自分のホーム優先にのみならないようにお願いします。

衣・食・住に関わることは、運営支援部に必ず相談しながら進めてください。個人の生活感覚ではなく、この施設が大事にしてきた考え方で進めてください。判断で迷うときは、最終は園長の判断となります。清潔に暮らすこと（掃除 片付け）これはとても大事なことです。子どもの服装についても同様です。

新しい養育ビジョンはあまりに多くの問題を抱えています。国は予算措置という形でこの流れ以外は認めない状態です。私達は、**制度がどう変わっても子どもの養育を大事にしたい**と思います。

2. この施設の建設時点で考えていた「施設の縮小と地域の支援」のために、2014 年度に、**児童家庭支援センター**を視野に入れた大規模修繕（月の家）を行いました。残念ながら 2020 年度は、北薩地区への設置となりました。すでに南さつま市からは、いくつかの事業委託が進みつつあり、ファミリーサポートセンターや利用者支援事業を行ってきた「こみなとさん家（規模の縮小となる）」と意見交換を進めています。ようやく**南薩地域への設置がきまり、実現をめざしたい**とかがえています。

児童家庭支援センターの実質的な活動を準備しつつ、力を合わせて地域子育て支援を進めましょう。

3. これらを実行する中で、養育と支援を実現していきたいと考えています。

そのために、これまで研究してきた養育システムの現実的展開、地域支援を考えたコモンセンスペアレントトレーニングの正式導入を開始したいと考えます。又、非暴力的危機介入法（CPI）の強化を進めます。